

トピック A. 小・中・高校生の比較))))

(1) 教科の好き嫌いと理解度、興味

国語、社会、数学(算数)、理科、英語、音楽、美術、体育、技術・家庭の9教科の中で好きな教科ベスト3は、小学生①体育(80.9%)、②理科(71.3%)、③国語(61.0%)、中学生①体育(65.1%)、②理科(52.8%)、③数学(45.4%)、高校生①体育(65.6%)、②社会(45.0%)、③国語(42.5%)であり、いずれの学校段階においても体育の人気がもっとも高い。

いずれの教科も「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少するが、特に理科の人気は低下が著しい。小学生と中学生では2番目に人気がある理科は、高校生になると最下位になる。(図3-1)

この原因を示しているとも考えられるのが授業の理解度(図3-2)である。教科の好き嫌い同様、授業の理解度は小学生から高校生にかけて段階的に低下している。さらに、ここでも変化著しいのが理科(71.3%から27.3%に減少)である。また、勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生から中学生にかけて確実に減少していることも明らかである。(図3-15)

(2) 学校外での勉強

塾、家庭教師、通信教育、塾や予備校の夏期講習といった学校外教育機関の利用率がもっとも高いのが中学生である。これらの利用率は高校生よりも小学生のほうが高いが、代わりに高校生の利用者が多いのは、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)である。(図3-7)

家での勉強も、高校生は中学生より学校の授業にウエイトをおいたものとなっている。高校生が家でする勉強のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の予習、③学校の授業の復習であるが、中学生のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の復習、③書店などで売っている問題集・参考書である(図3-6)。また、家では学校で使う教材を中心に勉強する者は、中学生では57.9%であるが、高校生では92.8%にのぼる。(図3-8)

(3) 学習上の悩みと成績観

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の唯一の悩みともいえるのは教科の好き嫌いであるが、これに対して中学生や高校生の悩みは数多い。中学生の特徴は、自己の能力観に関連する悩みを持つ者が多いことである。一方、高校生の悩みは、勉強すること、学習内容そのものに対する疑問にあり、能力観に関する悩みを持つ者は中学生よりも少ない。(図3-16、図3-17)

自己能力に対する否定的見解は、中学生の成績観にも現れている。「どのくらいの成績がとれたらいいか」「うんとがんばればとれる成績」に対する中学生の回答は、小学生や高校生に比べて控えめであり、自己の能力の限界を低めに設定する傾向が見える。(図3-11、図3-12)

トピック B. 1990年との比較))))

(1) 理科や数学を好きだという中学生の割合が増えている。「理数系離れ」の問題は、中学校段階ではむしろ「好転」しているようである。(表1-1)

(2) 「理数系」への回帰は、教科の理解度の面でも起こっている。(表1-2)

(3) 授業を消極的にしか受けない中学生が減り、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」という回答もかなりの増加を示している。(図1-2)

(4) がんばって勉強したい教科として、「英語」をあげる者が減少した。(表1-3)

(5) 勉強時間、テレビ視聴時間、就寝時間については、目立った変化はみられなかった。(図1-4、図1-5)

(6) 家での勉強内容のうち、「『進研ゼミ』のような通信教育」が増加し、同じ分だけ「宅配の家庭学習教材」が減っている。(表1-4)

(7) 家での勉強の様子は、ほとんどすべての項目で積極的な回答が増えている。ただし、「ながら勉強」も若干増加をみせている。(図1-7)

(8) 学習塾や予備校の利用率に大きな変化はみられなかった。「塾タイプ別」では、「補習塾」志向がいくらか強まったようである。(図1-8)

(9) 学校外の学習機会のうち、上の(6)と同様、「『進研ゼミ』などの通信教育」の利用率が増え、「宅配の家庭学習教材」の利用率が減った。(表1-6)

(10) 「問題集の問題を解く」と「教科書をくり返し読む」という勉強方法をとっている中学生が増加した。逆に、「辞書を引く」という学習の習慣は薄れつつある。(図1-9)

(11) 「カセットテープ教材やビデオ教材を使って勉強する」中学生が増える傾向がある。(図1-12)

(12) 成績観・学力観のうち、「学校生活エンジョイ志向」がいくらか強まり、「名門志向」が弱まっている。(図2-4)

(13) 勉強の効用を認める中学生がいくらか増えている。ただし、「一流の会社に入るのに」と「お金持ちになって豊かな生活をするのに」という効用を認める割合は減っている。(図2-8)

(14) 「先生にあてられてうまく答えることができたとき」「先生の説明がよくわかったとき」に「うれしい」と感じる中学生が増えている。(図2-9)

(15) 中学生の勉強をめぐる悩みは、今回も大きくは変わっていない。(図2-11)

《1980年～1996年 教育トピック》略年表

西暦	小学校	中学校	高等学校
1980	●小・中学校指導要録の改訂方針を通告(文部省) ⇒小1・2年生は3段階評定/到達度評価を加味		
1983	●義務教育標準法等改正⇒小・中学校は1991年度までに40人学級を実現する		●学校教育法一部改正(文部省) ⇒公立高校入試の弾力化
1985	●「特別活動の実施状況調査」(文部省)⇒日の丸・君が代の徹底を通知		
1987	●「幼稚園・小学校・中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」答申(中教審) →調和のとれた発達/個性を生かす教育/国際理解		
1988			●単位制高校教育規定施行 ⇒単位制高等学校制度の創設
1989	●小・中・高の「学習指導要領」告示(文部省)⇒小学校1992/中学校1993/高等学校1994年施行 →小学校=「生活科」導入 →中学校=選択教科の履修幅拡大,習熟度別学級編成導入 →高校=普通教科の科目を多様化,社会科を「地理歴史科」「公民科」に分割 「新学力観」の提唱 →「自ら学ぶ意欲」「社会の変化に主体的に対応できる能力」が求められる		
1990	●新学習指導要領の移行措置開始 ⇒道徳と特別活動の全面実施		●初の大学入試センター試験実施
1991	●小・中学校で40人学級全面実施		●「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」答申(中教審) →普通科と職業科を総合した学科の新設/40人学級化
1992	●小・中学校の「指導要録」を改訂(文部省)⇒絶対評価中心へ転換 →「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」を重点に置いた学習評価へ		
1992	●学校週5日制実施(幼・小・中・高)⇒第2土曜日休み		
1993		●「新学習指導要領に基づく中学校の教育課程編成状況」公表(文部省) ⇒約9割の学校で外国語を週4時間に	●高校教育改革推進会議第4次報告(最終報告) ⇒「総合学科」創設を提言
1994	●文部省令改正⇒学校週5日制を1995年度から月2回(第2・第4土曜日休み)実施とする		●家庭科4単位必修へ ⇒男女共必修
1995	●月2回の学校週5日制実施⇒第4土曜日も休み		
1996	●小学校に英語教育導入(中教審) ●小・中・高の学校週5日制を「21世紀初頭を目標」に完全実施(中教審) →求められる能力は「生きる力」=「自ら学び、考え、主体的に判断する能力」		

凡例：⇒…事項の簡単な解説/→…要点・関連事項・具体的内容など

【参考文献】

◎江川致成・高橋勝・葉巻正明・望月重信編著「最新教育キーワード137」時事通信社、1995

◎伊ヶ崎暁生・松島栄一編「日本教育史年表」三省堂、1990

◎清水一彦・赤尾勝己・新井浅浩・伊藤稔・佐藤晴雄・八尾坂修著

『教育データランド'96-'97—A DATABOOK OF EDUCATIONAL STATISTICS』時事通信社、1996

トピック C. 学校週5日制、新教育課程、メディアの影響をめぐって)))

教育改革や時代変化が中学生の学習行動や学力観・成績観に与えた影響を正確に特定することはできない。ここでは、Bの変化を考慮に入れながら、学校週5日制、新教育課程、メディアの影響について、推測をまじえて整理してみる。

(1) まず、「理数系への回帰」という現象は、パソコンなどのメディアの普及にともなって、理数系アレルギーがいくらか減ったのかもしれないし、あるいは理数教科の授業方法の工夫が進んだのかもしれない。(表1-1、表1-2)

(2) 授業への積極的な姿勢は、自分で考えることを重視する学習方法の転換の結果かもしれないが、むしろマニュアル化された学習に慣らされたことによるのかもしれない。(図1-2)

(3) 英語は人気度や理解度の点で若干「好転」しているが、「がんばって勉強したい」という意識は逆に薄れてきている。「自ら学ぶ意欲」を育てようという新教育課程のねらいとはいくらが食い違いをみせている。(表1-1、表1-2、表1-3)

(4) 家での勉強もかなり積極的である。とはいえ、これも「問題集をくり返し解く」とか「教科書をくり返し読む」といった、どちらかといえば、機械的・反復的な学習が増えていることによるのかもしれない。(図1-7、図1-9)

(5) 学校外の学習機会のうち、特に通信教育が台頭している。これは、もしかしたら反復練習の機会を増やしていることにつながっているのかもしれない。(表1-6)

(6) 「辞書を引く」とか、さらに自分で詳しく調べてみる姿勢は乏しくなっており、新課程の意図とは別に、じっくりと学習したり自発的に学ぶ姿勢はむしろ希薄になっているようにも見える。(図1-9)

(7) 勉強への積極性の背景の1つには、社会的地位達成の手段としての勉強という見方がある。さすがに勉強の経済的効用を認める意識は薄いだが、学ぶこと自体を楽しむという方向には結びついてはいない。(図2-8)

(8) 学校週5日制が部分実施されているが、中学生の学習生活パターンに大きな変化はみられなかった。休みの土曜日の勉強時間は日曜日のそれと同様であるが、学習塾通いはいわば「飽和状態」にあり、あらたに塾通いを促すことにはならなかったようである。(図1-4、図1-8)

(9) 現在の成績の自己概念による影響の強さという点で、大きな変化はみられなかった。学習への報酬のあり方が大きく変わらない限り、新教育課程の意図は中学生の学習行動の中に具体的な成果として現れることは難しいのかもしれない。

(10) もうひとつ注意しなければならないのは、地域による違いである。学校外の学習機会の状況によって中学生の学習行動は大きく異なってくる。さまざまな教育改革や社会変化の影響も地域によって微妙に異なってくると予想される。

(11) メディア利用は、いまのところテレビゲームなどの「遊び」が中心である。パソコンを勉強の中で利用するには、いましばらくの時間がかかりそうである。今後の動向を見守っていく必要がある。(図1-12)